資料2

浜松研究会報告

ミュージックサイレンの歴史と現在

●上野　正章
Masaaki UENO
京都市立芸術大学

●兼古　勝史
Katsushi KANEKO
立教大学

キーワード：ミュージックサイレン、ヤマハ、浜松市、サウンドスケープ、音環境

要旨

戦後日本各地の音風景を特徴づけてきたもののひとつにミュージックサイレンがある。ヤマハ株式会社が開発した改良型サイレンで、音程の異なる複数のサイレンを組み合わせて、メロディを奏でることを可能にしたものである。1950 年に一号機が完成してヤマハ本社で吹鳴を開始すると、徐々に人気を呼んで各地の庁舎や出先機関、工場、デパート、銀行などの民間施設が導入を試み、のべ 184 台ものミュージックサイレンが日本のみならず海外にも鳴り響いた。

本発表は 2018 年 8 月 21 日に行ったヤマハ本社におけるミュージックサイレンの調査に基づき、後日調査の結果も交えつつ、ミュージックサイレンの歴史と現在を共同で報告する試みである。過去の文献等を参考に初期のミュージックサイレンに文化史からアプローチすると同時に、関係者へのインタビュー等に基づき現状についてまとめた。

序

毎日時を報ずる音楽サイレンの美しい音色は楽都浜松の象徴となっている。（1960 年代に刊行された『浜松市案内観光と産業』）[1]

戦後日本の音風景を特徴づけてきたもののひとつにミュージックサイレンがある。ヤマハ株式会社が開発した改良型サイレンで、音程の異なる複数のサイレンを組み合わせて、メロディを奏でることを可能にしたものである。

本稿は 2018 年 8 月 21 日にヤマハ本社で調査させていただいたミュージックサイレンに関する調査に基づき、後日調査の結果も交えつつ、ミュージックサイレンの歴史と現在を報告する試みである。上野は過去の文献等に基づき、初期のミュージックサイレンに文化史からアプローチした（第１章）。兼古はヤマハ関連企業のミュージックサイレン管理・運用者らからのヒアリング及び後日のアンケート調査に基づき、主として現状と今後の展望について記した（第２章）。

1　初期のミュージックサイレン

1-1 黎明期のミュージックサイレン[2]

ミュージックサイレンの構想は終戦直後にさかのぼる。きっかけは「生産を再開した楽器工場で働く人々に始業や終業などを知らせるためにサイレンが必要」[3]だが、サイレンの音は聞く者に戦争の恐ろしい記憶を呼び起こすという問題だった。これに、当時の社長川上嘉市がサイレンの音を改良するというアイディアを出し、製品開発へと進展していったのである。川上死去の際に編まれた『日楽社報』の追悼記事に、当時の開発担当の小野俊が寄せた回想があり、詳細を知ることができる。「終戦後しばらくはサイレンの音は人々の心を縮み上らせたものです。この不愉快な音を楽器会社の名にふさわしくきれいな、そして快い音にするようにと言われたのが故川上会長でした」[4]。

川上には世界戦略としてのミュージックサイレンという構想もあった。試作機が出来上がったときの感想である。「美しい音色のサイレンが出来れば、日本中は勿論のこと世界のすみずみまで、この音楽のサイレンのメロデーを響かせようと大きな抱負をお話しになりました」[5]。同じく小野は、会長の言葉を聞き、次のように解した。「常に世界的視野に立ってヤマハの名を世界に行きわたらせようとされた故会長の遠大な計画の一端がうかがわれました」[6]。

川上は美しく力強い経済でもって世界に再び雄飛する日本を思い描いていたのかもしれない。ミュージックサイレンは妙なる大きい音を発するのみならず、一度据えつけられれば動かしがたいという特徴もある。

試作機のミュージックサイレンが出来上がると、1950 年 9 月から試験運用が開始された。記事は試作機の吹鳴開始を伝えたものである。

> 7 馬力半のモーターにそぞれれ[ママ]音色の違う 8 穴（A 音）9 穴（B 音）10 穴（C 音）12 穴（E 音）の 4 個のサイレンをとりつけ継電機の回転胴が作曲ベンに作用し、美しいハーモニーをかなでる[。]この試作品は同社屋上にとりつけられ朝 7 時半の開門から午後 6 時の閉門まで前後 10 回吹鳴され市民の耳を楽しませている[7]。

穴というのはミュージックサイレンの内部ドラムとドラムケースに開けられた穴である。ミュージックサイレンは内部ドラムが回転すると一定の時間間隔で二つの穴が揃うように設計され、また内部ドラムには羽根が付いていて外部の空気を取り込むことができるようになっている。ドラムが回転すると取り込まれた空気が遠心力によって圧縮され、穴が開くと空気が噴出する。このプロセスが繰り返され、回転数が閾値を超えると音が生み出される。音高の調

節は穴の数とモーターの回転数で行われ、穴の数が多いほど、また回転が速いほど単位時間当たりの空気の圧縮と放出の回数が増加するから音程は高くなる。1秒あたりのモーターの回転数に穴の数を掛けたものが1秒間当たりの空気の圧縮・放出サイクルの数、すなわち周波数になる[8]。

初期の吹鳴状況は、最初期にミュージックサイレンを報じた『静岡新聞』の記事に詳しい。

> 始めは朝7時半最終の6時までの間に14回も鳴らされる、1回1分半だが、係りの守衛さんがスイッチを押せば静大教育学部の本間先生[9]が作曲した二節からなる曲がサイレンとなつて吹奏され、その音はちようどパイプオルガンの吹奏とそつくり、従来の単調なサイレンと異なり非常に情緒的だと好評を博している[10]。

(A音)(B音)(C音)(E音)の4音だけなので、構成できる旋律は限られている。本間の作曲した旋律は、ごく簡単なものだったと思われる。なお、一日に鳴るミュージックサイレンの回数に関して『読売新聞』と『静岡新聞』とでは食い違いがある。試行期間だったので、様々な可能性が試されていたのかもしれない。

ミュージックサイレンの正式運転が始まったのは、同年の12月であった。設置は本社工場4号館である。

> 26年12月20日本社工場でミュージックサイレンが吹奏を開始した。川上嘉市会長が戦後、21年から5年の歳月を費やして開発したもので、戦中の思い出につながる従来のサイレンにかえて、美しいメロディを奏でるこの新しいサイレンは販売開始とともに、学校をはじめ各地の公共施設や工場などに設置されていった[11]。

この時点で始めて旋律が鳴り始めたことが判明する。曲名は次の通りである。

表1　曲名一覧表[12]

時刻	曜日		曲目	作曲者
8:00			埴生の宿	ビショップ
12:00			菩提樹	シューベルト
17:00	月曜日／水曜日		家路	ドヴォルザーク
	火曜日		峠の我が家	アメリカ民謡
	木曜日		月の光	ドビュッシー
	金曜日1	一週間毎に交互	アラベスク	ドビュッシー
	金曜日2		トロイメライ	シューマン
	12月最終稼働日		蛍の光	スコットランド民謡

もっとも、このリストは現行のものであり、新聞記事の引用からも示されているように、導入当初の吹鳴回数は現在よりも頻繁であった。曲名に関しても、おそらく幾分食い違いがあるかもしれない。実際、正月は特別に上眞行作曲、千家尊富作詞の《一月一日(いちげついちじつ)》が演奏されていた[13]。

ミュージックサイレンは、開始早々、浜松でどのように受け止められたのだろうか。当時を伝える貴重な資料に1953年の『読売新聞』朝刊に掲載された「音楽サイレン楽器の町に鳴りひゞく」という読者からの投書記事がある。「私たちの名物」と題した各地の児童が自分の町の名物、名所、特産品等を紹介するコラムだが、浜松の名物としてミュージックサイレンが取り上げられている。記事は近況から始まる。

> 多くのサイレンにまじって、あの《年の始めのためしとて…》の音楽が各室に鳴り響いてます。去年の暮れには《蛍の光》だったのですが、新年からはこの音楽にかわりました[14]。

多くのサイレンが町では鳴っているという当時の状況および、ミュージックサイレンの季節に応じた移り変わりを知ることができる。次いでミュージックサイレンの紹介に移り、ミュージックサイレンが去年から鳴り始めたこと、サイレンが日本楽器製であることに触れた後、「いつまでも戦時中の空襲警報や火事を思い出させるようなサイレンではいけないといって、会社のおじさんたちが苦心して作られたということです」[15]と紹介される。『社史』で綴られたミュージックサイレン開発に寄せる思いが広く一般に知られていることが分かる。記事は1953年で、終戦から8年後の発表である。第二次世界大戦の記憶がまだまだ生々しい。

ミュージックサイレンがどのように聴かれていたのかということに関しても情報を与えてくれる。「お昼のお弁当の時間には「早くあのサイレンが鳴らないかなア」と皆で耳を澄まして待っています。きっと工場で働いているおじさんたちもそうだろうと思います」[16]。時報としての活用が判明する。教室に時計が設置されていなかったことが推し量られる。最後の箇所では、ミュージックサイレンに寄せる思いが綴られている。

> 浜松にはこの日本楽器をはじめとして多くの楽器工場があります。そしてピアノ、ハーモニカ、シロフォンなど、いろいろの楽器を国内だけでなく、広く海外まで輸出しています。――中略――戦時中は軍需工場の町だった浜松も、いまでは日本一の楽器の都として生まれ変わりました。そして浜松の子供たちは、毎日この音楽サイレンを聞いて、明るく楽しく暮らしています[17]。

浜松の軍需産業からの決別と明るい浜松の毎日の暮らしが報じられている。ミュージックサイレンと結びつく平和は、広く新聞読者に共感を呼んだと思われる。また、全国紙に掲載された記事なので、広く日本中の人々がミュージックサイレンを知るきっかけになったと思われる。

1-2 ミュージックサイレンの普及

ミュージックサイレンは内外に設置され、最終的には同タイプのものが184台据え付けられることになった[18]。「美しいメロディを奏でるこの新しいサイレンは販売開始とともに、学校をはじめ各地の公共施設や工場などに設置

されていった」[19]。

いくつか拾ってみると、たとえば、1951 年、銀座にヤマハ東京支店ビルを新築する際にミュージックサイレンが設置された。「自動的にいろいろな曲を奏でる仕組み[で]、長さ 5 メートル幅 2 メートル余、総重量 12 トン 15 馬力のモーターで動かすが普通約 4 キロ、風のないときは約 8 キロ範囲は聞える」[20]という大掛かりなものであった。銀座 7 丁目から 8 キロというと山手線内を覆い、西は荒川に達しようかというほどの広大な領域である。「銀座通りに和やかな音のサイレンが鳴り渡ると、付近のビルの窓は人々の顔が寄り合い、道ゆく人々は思わず空を仰いで驚きの声を上げた」[21] と『社史』に記されるように、大音量は多くの人々を驚かすほどであった。

演奏回数は、朝 8 時、正午、夕方の 3 回であり、1 分間ずつ毎日吹鳴された。曲名はモーツァルトの《イ短調ソナタ》や《新世界》、《アニーローリー》など数曲で、交互に演奏されていた[22]。

あるいは岸和田市は 1954 年、市庁舎新築の際に屋上にミュージックサイレンを設置した。全国で 6 番目のサイレンであり、総工費 100 万円、12 音を発する仕様である。曲名は、朝に島崎藤村の《朝》、昼に《おおスザンナ》、夕は《荒城の月》、祝日には《君が代》が吹鳴された。なお、ミュージックサイレンが選ばれた理由は、「普通のサイレンでは戦時中の空襲サイレンを思い出して恐怖心をあたえる心配がある」[23]ためであった。

1959 年には三重県上野市（現在の伊賀市）の上野産業会館屋上でミュージックサイレンの吹鳴が始まった。一日 4 回で、毎日午前 7 時と正午には《魔弾の射手》、午後 6 時には《家路》、午後 10 時は《おやすみ》である。《おやすみ》は地元桃青中学校の東仁己の作曲で、演奏時間はそれぞれ 30 秒間であった[24]。

いずれも写真付きの記事で報じられ、サイレン設置を大歓迎している地域の人々の様子を見て取ることができる。

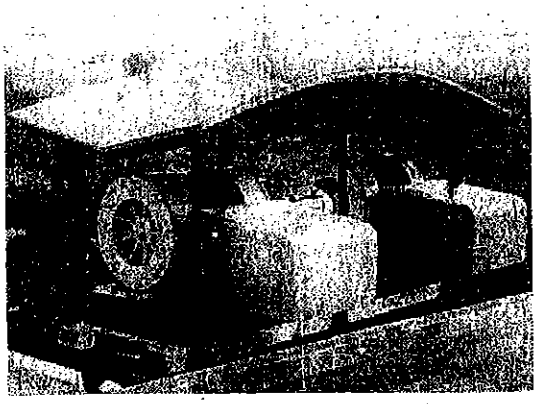

図 1　上野産業会館屋上のミュージックサイレン[25]

1-3 今後の研究に向けて

その後のミュージックサイレンを簡単に整理すると、1982 年の上野市役所への設置を最後にモデルチェンジが行われた。まず、MIDI 制御が可能になった。また、素早いシャッターの開閉を実現することによって早いパッセージも演奏できるようになった。純正律に替えて平均律が採用されることによって、転調も容易になり、音域も最大 24 音まで拡張された。価格は 1000～1500 万円程度である。

もちろんのこと、さらに広くサイレンが導入されることを期待してのことであっただろう。しかし、結論から言うとサイレンの売り上げは一定数に止まった。一号機との入れ替えも含めて販売台数は全部で 12 台だった。

理由は様々に考えられる。サイレンを騒音と受け止める人々の出現と漸増。時計の普及等々。提唱したいのが、これらに加えて空襲サイレンの記憶の風化を理由に加えることである。過去の文献にしばしば見出すことができたのが、空襲警報に結びついた従来型のサイレンの記憶を刷新するためにミュージックサイレンが歓迎されたという記述であった。戦争を通じて空襲サイレンの音が広く人々に共有され、同時にこれが否定的な音であったがゆえに、挙ってミュージックサイレンが導入され、逆に、戦争体験の風化に伴ってサイレンへの興味が失われていったのではないだろうか[26]。

（上野正章）

2…「ミュージックサイレン」管理・運用者への聞き取り調査から

2-1 楽器としての運用

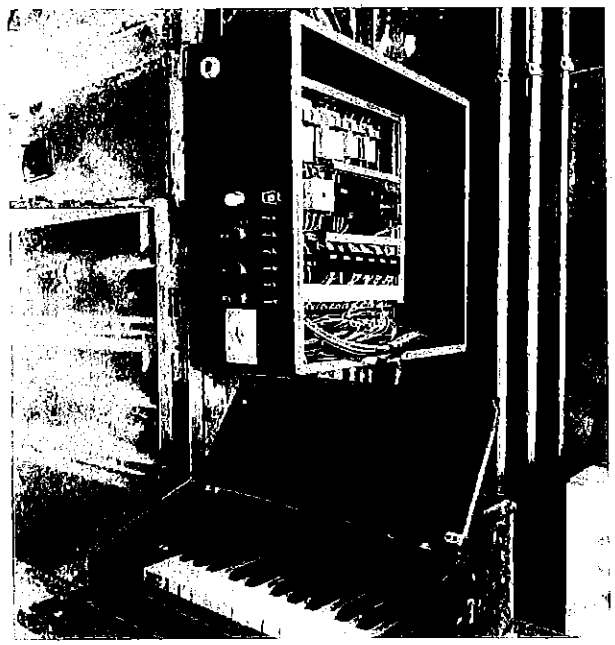

図 2　ヤマハミュージックサイレン初号機につながっていた鍵盤型スイッチ（ヤマハ本社工場にて）

ヤマハ・ミュージックサイレンが、他の公共的時報と大きく異なるのは、それがテープやデータに固定された録音音源の再生による「放送」ではなく、あくまでも「楽器」であるという点だ。音はそのつどゼロから生まれ「吹鳴」（演奏）される。そのことを端的に物語るのが、1950 年から 81 年までヤマハ本社工場の時報として使用された「初号機」（第 1 世代機）に接続されていた鍵盤型操作スイッチ

の担当者からは「（ミュージックサイレンとメロディベルは）どちらも音環境問題と言う社会課題に対するヤマハとしての解決策の提案であった事は間違いないと思います。その文脈で言えば実は、サイレントシリーズ（ヤマハの消音システム搭載楽器の総称）も同じなのかもしれません。」という回答があった。事業上のつながりはそれぞれ別であったとしても、そこには楽器製造企業による「音環境への取り組み」という共通の理念があったという意味で、ミュージックサイレンは現代社会のニーズへとつながっているのである。

最後に、あらためて、楽器としてのミュージックサイレンという原点に立ち返ってみたい。管理運営社員の「楽器としてこんなに多くの方に演奏（吹鳴）を聴いてもらえた、（中略）地域の人々の暮らしの中に溶け込んだ楽器は他にはない」という言葉に見られるように、ミュージックサイレンは楽器であって、オルゴールやからくり時計、ピアノロールなどと同様に自動演奏楽器の系譜につながるものであるともいえる。私たちは、楽器というと「音楽を演奏する」ための道具と思ってしまいがちだが、じつは公共空間にメッセージを伝えるための信号音としての楽器（音具を含む）の伝統は「太鼓」や「鐘」「カリヨン」、「法螺貝」「ポストホルン」など脈々と続いてきたのであり、「ミュージックサイレン」はそうした楽器による信号音の現代における後継者なのだともいえるだろう。

地域のシンボルであり、戦争と平和の記憶をつなぎ、昭和の音風景を伝え、信号音としての楽器の伝統を今に受け継ぐミュージックサイレンが、今後も何らかの形で浜松の街に響き続けることを願ってやまない。

（兼古勝史）

---

[1] 浜松市・浜松市観光協会『浜松市案内　観光と産業』浜松市・浜松市観光協会、[1967年]、unpaged.

[2] ミュージックサイレンの先行文献として兼古勝史「ミュージックサイレン　平和の時代を告げた時報」『B-maga』2018年10月号、サテマガ・ビー・アイ、2018年、p.51.がある。適宜参考にした。

[3] 調査において視聴したNHK制作の番組に基づく。

[4] 日本楽器製造株式会社『社史』日本楽器製造株式会社、1977年、pp.112-113.

[5] 同書、p.113.

[6] 同書、p.113.

[7] 同書、p.113.

[8] 詳細は、胃の飢ゑ飽き踏み『技術エッセイ　技術と洒落とエスプリと』静岡学術出版、pp.266-277.

[9] 本間彦作。

[10] 無記名「音楽的な工場サイレン　浜松の日本楽器で新考案」『静岡新聞』昭和25年、静岡新聞社、1950年。

[11] 日本楽器製造株式会社『社史』日本楽器製造株式会社、1977年、p.124.

[12] 当日配布資料：ヤマハ株式会社『日本サウンドスケープ協会様　ミュージックサイレンご紹介』ヤマハ株式会社、2018年より引用。なお、曲目や時間は現在のものであり、吹鳴回数を含めて過去の変更が行われている。

[13] 酢山義則「私たちの名物　音楽サイレン　楽器の町に鳴りひゞく」『読売新聞』昭和28年1月13日、読売新聞社、1953年。

[14] 同書。

[15] 同書。

[16] 同書。

[17] 同書。

[18] 国外は台湾とフィリピンの日本領事館に設置された。

[19] 日本楽器製造株式会社『社史』日本楽器製造株式会社、1977年、p.124.

[20] 無記名「楽しい音楽サイレン　銀座にお目見え」『毎日新聞地方版』昭和26年12月13日、毎日新聞社、1951年。

[21] 日本楽器製造株式会社『社史』日本楽器製造株式会社、1977年、p.124.

[22] 無記名「楽しい音楽サイレン　銀座にお目見え」『毎日新聞地方版』昭和26年12月13日、毎日新聞社、1951年。

[23] 無記名「岸和田にミュージックサイレン」『読売新聞地方版』昭和29年、読売新聞社、1954年。

[24] 上野市のミュージックサイレンに関しては、次の記事を参照。無記名「美しい音を響かせて　上野市に音楽サイレン」『伊勢新聞』昭和34年、伊勢新聞社、1959年。

[25] 同書。

[26] 音楽的意味に着目した標識音の研究に、箕浦一哉「『夕方5時のチャイム』の公共性：山梨県富士吉田市の取り組みから」『日本サウンドスケープ協会2013年度秋季研究発表会論文集』日本サウンドスケープ協会、2013、pp. 1–5. がある。

[27] 調査日以後のメールによる質問への回答。ミュージックサイレンの日常的な管理・運用者であるヤマハファインテック株式会社ＦＡ事業部技術部技術グループ主事野尻竜章氏及び、株式会社ヤマハビジネスサポート総務事業部事業所管理部部長 兼 本社事業所管理センター長 大石幸作氏、同本社事業所管理センター 杉山進氏による。

[28] 当日配布資料：ヤマハ株式会社『日本サウンドスケープ協会様　ミュージックサイレンご紹介』ヤマハ株式会社、2018年、p6、「歴史と経緯」より。

[29] ヤマハファインテック株式会社ＦＡ事業部技術部システム技術グループ主事野尻竜章氏からご提示いただいた「旧型ミュージックサイレン納入状況表（昭和26年から昭和57年）」による。

[30] ヤマハファインテック株式会社ＦＡ事業部技術部システム技術グループ主事野尻竜章氏による。

[31] 日本サウンドスケープ協会浜松研究会　兼古、小林田鶴子による調査。

[32] 浜松市内在住の日本サウンドスケープ協会会員（浜松調査参加者）による証言。

[33] 脚注27に同じ。

[34] 総務事業部事業所管理部本社事業所管理センター　杉山進氏による。

[35] 脚注28に同じ。

[36] 当日配布資料：ヤマハ株式会社生産技術統括部メカトロ精機部『ヤマハミュージックサイレン』カタログ、1989年。

※この論文は2018年12月2日（日）に青山学院アスタジオ（東京都渋谷区）で開催された「日本サウンドスケープ協会 2018年度 秋季研究発表会」における企画セッション「第2部・浜松研究会報告」報告2：ヤマハ本社のミュージックサイレンの配布資料である。

伊賀上野のミュージックサイレン

日本サウンドスケープ協会第3回例会報告書

2019年3月

伊賀上野のミュージックサイレン小史……上野 正章 1

城下町に吹鳴の意味をたずねて
伊賀上野ミュージックサイレン印象記……大門 信也 7

ミュージックサイレンの鳴る町……今井 信 11

ミュージックサイレンの記録映像……佐々木 幸弥 14

日本サウンドスケープ協会

伊賀上野のミュージックサイレン小史

●上野　正章
UENO Masaaki
京都市立芸術大学日本伝統音楽研究
センター研究会研究員

キーワード：音楽時報、伊賀市、上野市、音環境、サウンドスケープ

はじめに

伊賀市（伊賀上野）のミュージックサイレンに関する記述は書物やインターネットでしばしば見出すことができるが、総合的なものは無い。本稿は伊賀市上野図書館等の蔵書を参考にして、旧伊賀市庁舎に設置されているミュージックサイレンの沿革を簡単にまとめたものである。

1　ミュージックサイレン設置の経緯

『上野市[1]広報』（昭和 33 年 2 月）に掲載された上野市婦人会連絡協議会 のミュージックサイレンに係る寄附の呼びかけは、設置の経緯を詳しく教えてくれる。

> 毎日正午の時間を知らせるサイレンは、時に戦時中の悪夢を想い出し、火災警報と間違えるから、このサイレンを私たちの手で「音楽サイレン」に、きり替えたいという意見が度々出ていましたが、経費の関係からなかなか実現できませんでした。ところが、このたび上野市ロータリークラブの方々からご賛同をいただき 10 万円のご寄付をいただきました。
>
> この機会に是非とも宿願を達成したいものと、ここに上野市婦人会連絡協議会として目標額 10 万円の募金運動に乗り出すことになりました。
>
> ミュージックサイレンは全国的に広まりつつあります。私たちが、この音楽サイレンを使用したい理由は日常生活を明るく楽しいものにしたいという念願にほかならないのでございます。
>
> 市民の皆さま、この趣旨にご賛同下さいまして、ご協力をお願いいたします[2]。

まず、ミュージックサイレン設置の気運が市民の間にあったということが分かる。また、一般的なサイレンが使用されていて、これが戦時中の悪夢を思い起こさせるために嫌悪されていたということもわかる。さらに、従来型サイレンからミュージックサイレンの交換に立ちはだかる難問は購入資金であったということも判明する。

しかし、どのようにして伊賀上野の人々はミュージックサイレンの情報を得たのだろうか。さも当たり前のことのように「ミュージックサイレンは全国的に広まりつつあります」と記されているが、当時の市民たちはどの程度ミュージックサイレンに関して知っていたのだろうか。まず、実物については、昭和 29 年に岸和田市の市庁舎に、昭和 30 年には四日市市の市立富洲原小学校にミュージックサイレンが設置されている。おそらく、これらを通じてミュージックサイレンを知った人々がいたに違いない。あるいは、ミュージックサイレンは全国紙でも報じられている。例えば、1950 年 9 月 11 日付の読売新聞朝刊に「音楽サイレン登場」というタイトルで、写真入りで、ミュージックサイレンが紹介され[3]、同年の 1 月には、同じく『読売新聞』に「音楽サイレン　楽器の町になりひゞく」と題して、中学生の作文が掲載されている。「ほら、けさもまた、私たちの町には、多くのサイレンにまじって、あの「年の始めのためしとて…」の音楽が各室に鳴り響いています。去年の暮には「蛍の光」だったのですが、新年からはこの音楽に代わりました。このサイレンは去年から浜松の新名物となった日本楽器の音楽サイレンです――略」[4]という具合である。おそらく、これらを通じて知った新聞読者も、相当いたと思われる。その他、ミュージックサイレン製造元の日本楽器製造株式会社[5]の『日楽社報』に掲載された記事に、「既にラジオ放送でも『ふるさとの街』、『職場めぐり』、その他の番組に於ても[音楽サイレンが]数回に及び紹介され、全国的に有名になりつゝあるのは誠に愉快なことである」という文章がある[6]。少なくない数の人々がラジオを通じてミュージックサイレンを知ったと思われる。

上野市婦人会連絡協議会の寄付を募る企ては順調に進んでいった。次の引用は翌昭和 34 年の『三重実業新聞』の新聞発表で、市当局によるミュージックサイレン設置に係る前向きな検討が報じられている。

> 上野市婦人連協ではかねてミュージックサイレンを設置する運動を展開中であつたが、この工費は 35 万を要するので広く基金を募集中であつたところ、ロータリークラブから 10 万円の大口を得て残り 10 万円を市当局に寄附の申出をしているので、豊岡市長は近く議会に諮つてこの申出に応ずることとなつている[7]。

ミュージックサイレンの仕様や設置場所に関しては、『三重実業新聞』が、「市当局としては同じ設置をするなら、後 2 万円を追加することによつて、音色を 2 種にすることを得られるので、洋楽、邦楽の二本種としたい意向を持つている。設置場所は産業会館の屋上を当てゝいるが、

三月末に工事を完成して 4 月から放送を開始される」[8]と述べる。

産業会館とは上野市産業会館のことで、昭和 33 年 7 月に落成された 3 階のビルディング（一部 4 階）である。上野公園を背に上野市の中心部よりやや北、上野市駅付近に位置する。

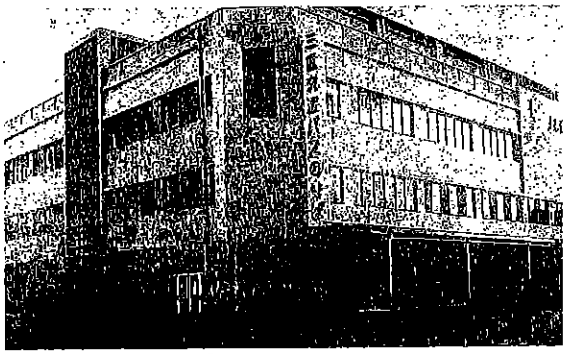

図 1　上野産業会館[9]

鳴らす音楽の曲目と頻度に関しては、『三重合同新聞』に、「音楽を 2 回聞けるサイレンにする予定である[。]近く着工の予定で 3 月に完成するが、午後 10 時のサイレンで早くお宅に帰つてその日を楽しんで了つて頂くという心づくしの鐘となる」[10]と記されている。2 回――おそらく 2 種類――のメロディーを流すことに決定していたようである。なお、同紙には「この施設は岸和田市のものを見学して考えたもので」[11]という記載があるが、ミュージックサイレン設置のために岸和田ミュージックサイレン見学会が行われたらしい。

曲目が正式に決まったのは、2 月になってのことであった。関係者の間で曲目の選定が試みられ、「ウェーバー作曲、オペラ魔弾の射手の第 3 幕狩人の合唱の主題歌▲ドボルザーク作曲の交響曲第 2 楽章ラールゴ▲上野市桃青中学校東仁己教諭作曲の 4 音用創作夢路の歌」[12]に決定された。

《夢路の歌》を作曲した東仁己は、大正 6 年 3 月 1 日生まれの教員、上野市の小中学校で教え、退職後は三重県立上野高等学校で講師として勤務していた。上野や伊賀の民謡収集を行った人物である[13]。ミュージックサイレンの曲目選定に深くかかわったと考えられるが、これ以上の記録は見出せておらず、現在調査中である。

2　ミュージックサイレンの吹鳴開始

吹鳴の開始は 26 日正午からで、当時の富岡市長がスイッチを入れ、《魔弾の射手》が全紙に鳴り響いた。

> 上野市婦人会連絡協議会（会長中林キリエさん）の骨折りで設置を進めていた音楽サイレンは 26 日正午から美しい音を響かせはじめた。この日の正午、豊岡市長ははじめてボタンを押し“魔弾の射手”の曲が響きわたつた[14]。

図 2　ミュージックサイレン[15]

最終的にかかった経費は 42 万円。可聴範囲は 4 キロメートル四方である[16]。

当時ミュージックサイレンはどのように受け入れられたのだろうか。非常に調べることが難しいテーマだが、幸いにしてミュージックサイレン設置 3 か月後に行われた市民アンケートが『三重実業新聞』に詳細に報じられている。全ての市民に対して行われたのかということは定かではないが、回収率は 36%で、まず、鳴らす回数・時間に関しては、「現行の 7 時、正午、18 時、22 時の 4 回を圧倒的に支持『聞える程度』では 75%までがよくきこえ、すえつけたことについて『よかった』と 92%まで喜んでいる」[17]。非常に多くの市民が耳にし、吹鳴時刻に関しても満足していることが分かる。このため、聞えない地域への増設についても「71%までが『つくるとよい』と賛成」[18]している。

> 今後、このサイレンを通じてどんな運動をしたらよいのかとの質問に対しては『最終サイレンで青少年を家に帰し、町を静かに眠らせたい』『10 時になればみんなが帰宅する』『朝のサイレンと最後のサイレンのあとに市長のあいさつを入れると、ほほえましい』など 20 数人が意見をのべている[19]。

総じて非常な好評がうかがわれる。「やかましい」、「吹鳴回数を減らしてほしい」という意見は無いが、上野市の人々が騒音に関して無関心であったというわけではなかった。この頃、市民から議会へ騒音取締りの要望がなされている。

> 最近上野市内の市場簇出（ゾクシュツ）、その他の商店街放送、或いは又バーなどに於ける深夜営業から来る音楽等々は附近住民に非常な影響を与え病人のある家庭などは全く絶え難い苦痛に悩んでいるが、市民数百名の調印をまとめて市議会にこの程取締り条例設置を申出ており、議会側に於ても他の都市の例を引証して研究調査に乗り出すこととなった[20]。

92%の市民が喜んだということは、言い換えるならば、8%の人々が無回答乃至何らかの否定的な意見を述べている可能性も否定できない。4キロメートル四方に響き渡るミュージックサイレンである。ミュージックサイレンの直下に住む人々や、設置された産業会館で働く人々にとっては、かなり喧しいものであったに違いない。

3　ミュージックサイレンの交換

昭和50年代頃からミュージックサイレンの調子が悪くなったという記述が散見される。おそらく市中でも噂されたのではないだろうか。最終的に市の広報に次のような御知らせが掲載された。

> 朝の7時、正午、夕方の6時、夜の10時――と一日4回、産業会館屋上から毎日、時を告げている“ミュージックサイレン”は、このところ老朽化し、また、凍結などで故障が多くなっています。
> このため、当分の間、吹鳴を中止します[21]。

故障状況は音が鳴らなくなるというものではなく、音が狂うというものであり、かなり苦痛を与えるものであったことが推察される。直ちに直してほしいという声と、騒がしいからやめてほしいという二つの声を『伊賀新聞』の社説はユーモラスに描き出している。

> [1982年]2月に入ったところで折からの寒気、上野市産業会館屋上に設置されているサイレン（みおつくしの鐘）が凍結で狂い出した。▽修理のため調整しようとすると、附近住民から「やかましい！！」とお叱り▽とうとう電源を切って、騒音公害に協力という次第。従つて現在の上野市は20余年に亘つて親しまれた“みおつくし”のサイレン、午前7時、正午、午後6時、午後10時の4回の吹鳴が消えた。いつの日復活するのやら…当分はアキラメ？[22]。

ところで、ミュージックサイレンの停止と時を同じくして、市の広報は一般的なサイレンの吹鳴に関するお知らせを掲載し始めた。例えば、8月6日と9日には、原爆投下に際して原爆死没者の慰霊と平和を祈念するために、サイレンの吹鳴が行われることが報じられる。

> 上野市でも8月6日（広島）と8月9日（長崎）の両日、それぞれの原爆投下時刻にサイレンを鳴らすことになりました――中略――
> 〔サイレンを鳴らす時間〕
> 8月6日（金）午前8時15分から30秒一声
> 8月9日（月）午前11時2分から30秒一声[23]

あるいは、『防災の日』に訓練を実施し、サイレンが吹鳴された。同じく上野市の広報に予告される。

> この日の午前9時には、内閣総理大臣から地震に関する『警戒宣言』が発令されたことを想定して、サイレンを鳴らします。
> この機会に、お宅の災害・地震対策について、もう一度点検してみてください[24]。

一般的なサイレンの定時吹鳴は不明だが、記事から推察する限りにおいて臨時吹鳴だったのではないだろうか。市当局の判断は分からない。しかし、徐々に生じてきたのはミュージックサイレン復活の要望だった。年末の新聞に、とうとう吹鳴再開が報じられる。

> 上野市民になつかしのミュージックサイレンが元旦から1年ぶりに復活する。
> 同サイレンは34年に、青少年の不良化防止と夕方には子供たちに家へ帰るようにとの願いを込め、上野ロータリークラブや一般市民が寄附して設置。市民からは“音楽時計”と親しまれてきた。ところが昨年12月、老朽化と雨もりで故障、そのままになっていた。しかし、市内の婦人団体などから復活を求める声が上がり、市が9月から市庁舎屋上に施設の取り付け作業にかかっていた[25]。

「9月から」という箇所から、この時点で吹鳴再開が決定されていたことが分かり、復活に際しての婦人団体の関与も判明する。また、興味深いのは設置理由である。「青少年の不良化防止と夕方には子供たちに家へ帰るようにとの願いを込め」[26]という理由である。『産経新聞』にも、「ミュージックサイレンは、青少年の不良化防止と、夕方には子どもたちに家へ帰るように願ってさる34年、上野ロータリークラブや一般市民が寄付して設置、最初は近鉄上野駅前の市産業会館屋上に設けられた」[27]と記され、『伊勢新聞』にも「同市のミュージック・サイレンは、青少年の健全育成が社会問題化した34年3月、市役所庁舎屋上に、大型ミュージック・サイレンが設置された」[28]と記される。ミュージックサイレンの設置目的は、「毎日正午の時間を知らせるサイレンは、時に戦時中の悪夢を想い出し、火災警報と間違えるから、このサイレンを私たちの手で『音楽サイレン』に、きり替えたい」[29]ということではなかったのだろうか。

注目したいのが、ミュージックサイレン切替に際しての教育長の言葉である。『伊賀新聞』には次のような記述がある。「▽米沢昇・教育長は『約20年前に婦人団体から青少年非行防止対策として寄附してもらつた。5年前にも修理したが、冬場になるとどうも具合が悪くなる。特別注文なので修理するのも東京から…とても経費が高くつく。新規購入になると300万円位という。篤志寄付か補正予算か。直れば市庁舎の屋上に設置したい』それまではお休み」[30]。断定はできないが、教育長の言葉が独り歩きした可能性は大いにある。誤認だったのかもしれない。サイレンの存続を考えて、戦争の記憶よりも現実性のある理由をアピールした方がよいという判断だったのかもしれない。しかし、最初に設置された際の「日常生活を明るく楽しいものにしたい」という考え方に青少年の健全育成ということが暗に

含まれていたという可能性も否定できない。

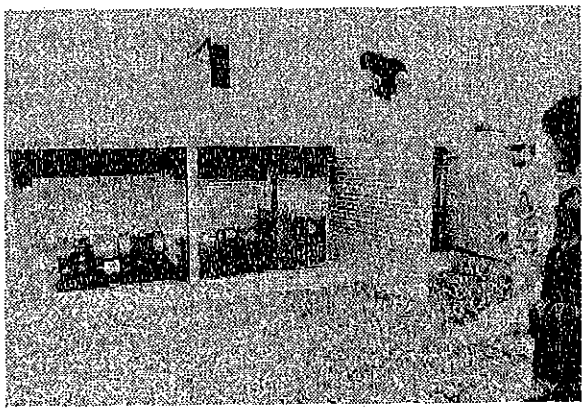

図3　新たに設置されたミュージックサイレン[31]

最終的にミュージックサイレンは取り替えられ、移転し、新年から再び吹鳴されることなった。また、更新に際して長さ4.4メートル、幅1.5メートル、高さ2メートルの家型防護室も用意された[32]。市の広報は、次のように市民にミュージックサイレンの吹鳴再開と移転を伝えている。

> 長い間、吹鳴を中止し、ご迷惑をおかけしていました“ミュージックサイレン”は、新年から吹鳴できるようになりました。
> 鳴らす時間と曲目は次のとおりです。
> 午前7時――組曲《ペールギュント》より「朝」
> 正午――《芭蕉》より「さまざまのこと思い出す桜かな」
> 午後6時――《新世界》より「家路」
> 午後10時――《ブラームスの子守歌》
> なお、“ミュージックサイレン”は、市庁舎屋上に設置されます[33]。

曲目の変更と設置場所の変更が簡潔に記されたあっさりとしたものである。《夢路の歌》に替えて《芭蕉》より「さまざまのこと思い出す桜かな」が加わったことが目を惹くが、《芭蕉》は澤しげき作詩、栗田三郎作曲の歌曲で、冒頭部分がサイレンのメロディーに用いられている。もちろん新聞各社もこれを報じたが、新聞社はこれらの情報に加えて予算もやや強調して報じた。『サンケイ新聞』は「長い間、市民に親しまれてきたミュージックサイレンの復活をのぞむ声が強く、市でも本年度予算に新しい機械の購入費 700 万円を計上、この設置となった」と報じ[34]、『伊勢新聞』も 700 万円と報じ、『伊賀新聞』に至っては、さらに踏み込んで「果して 700 万円もの巨費を投じた値打ちがあつたかどうかは、元日以後の市民の判定にまつところである」と書き記している[35]。この頃上野市の財政は財政再建団体に指定されるほどの状態であった。ミュージックサイレンの更新を苦々しく思っていた人々に対する配慮とうかがえる。

更新されたミュージックサイレンの可聴範囲を知る手がかりが、『伊勢新聞』と『毎日新聞』にある。『伊勢新聞』では「この日の吹鳴テストも上々で、市街地を中心に半径3−4 キロ以内では常時聞かれる」[36]と記し、『毎日新聞』では可聴範囲を半径 3 キロ内と記す[37]。旧サイレンの 4 キロメートル四方と比較すると小さく、大幅に聞こえる範囲が少なくなった。他方、『伊賀新聞』の社説には、聴こえ方に関する言及もある。

> この新しいミュージツクサイレンは音量が低く、今までのような効果音？が出ないという難点がある。市役所周辺では程よい快適な音量だが、少し離れたところまで音は届かない。新サイレンには凍結や雨が入らないようボツクスが設けられているのも、その原因の一つである[38]。

凍結や風雨を避けるために囲うことは致し方なかったにせよ、サイレンの庇護は騒音と受け止める人々に折り合いをつけるという意味もあったのではないだろうか。ミュージックサイレンの取替と移転はサイレン運用における大きな転換点であった。

なお、取り替えられたサイレンは演奏用の鍵盤が付き、リアルタイムで演奏できる仕様が加わった。これを活用して試みられたのが、元旦に音楽を鳴らす試みである。年末の『朝日新聞』が詳しく報じている。

> 上野市教委は元日に、復活するミュージックサイレンを利用して『年の始めのためしとて』ではじまる文部省唱歌《一月一日》を流すことを 27 日決めた。――中略――サイレンにはセットされたメロディー以外にも、手動式のけん盤で音楽をひけるところから、サイレンの復活記念と正月を迎える喜びを表そうと、《一月一日》の演奏を考えた。時間は午前 7 時の組曲《ペールギュント》を鳴らした後を予定しており、サイレン曲目選定委員の一人、岡村信也上野高校教諭にひいてもらうという[39]。

おそらく多くの人々が《一月一日》を耳にしたに違いないが、これに関する感想は現時点では見出せていない。

4　ミュージックサイレンの現状

その後ミュージックサイレンは、幾つか軽微な変更等を経て、現在に至る[40]。まず、2000 年度にサイレンは「伊賀のたからもの」に選定された。これは、「”あなたは、伊賀といえば何をおもい、何を連想しますか。あなたにとっての「伊賀のたからもの」を教えてください”」という問いかけに答えた応募から 100 点を選んで伊賀のたからもの 100 選」とするこころみで、（社）伊賀上野観光協会他、伊賀地域の市町村の観光協会による選定事業である[41]。

また、2010 年 4 月 1 日以降から夕方 5 時の吹鳴が防災行政無線を利用して実施されることになった。「合併に伴い、旧町村ごとに整備されていた防災行政無線を統合し、伊賀市全域への一斉放送が可能になったことから、災害発生時に緊急情報を確実に放送するため、試験放送を兼ねて実施」

[42]するためである。なお、この際に夕方 5 時の曲目が《七つの子》に変更された。

ただし、現伊賀市長の就任に際して（2012 年）、「生活の節目になっていたあの音楽をもう一度流せないかと考え、担当課と調整して復活」[43]し、再び夕方 6 時に《家路》が流れるようになった。市の広報に掲載された市長の談である。

> 伊賀市として合併して以降、午後 6 時からのミュージックサイレンは流されていませんでした。私が市長に就任した際に、生活の節目になっていたあの音楽をもう一度流せないかと考え、担当課と調整して復活させることができました。いつまでもこの音色をふるさとの音として残し、親しんでいきたいと思っています[44]。

現在伊賀市（伊賀上野）のミュージックサイレンは、旧伊賀市庁舎において、午前 7 時（組曲《ペールギュント》より「朝」）、正午（《芭蕉》より「さまざまのこと思い出す桜かな」）、午後 6 時（《新世界》より「家路」）、午後 10 時（《ブラームスの子守歌》）に吹鳴が行われている。

執筆者の補った箇所は［　］で示した。

執筆に際して日本サウンドスケープ協会共同研究プロジェクト浜松研究会の研究成果を参照させていただいた。感謝したい。

（本稿は日本サウンドスケープ協会 2008 年度第 3 回例会「伊賀上野のミュージックサイレンを聞く会」で行ったレクチャーに基づく）

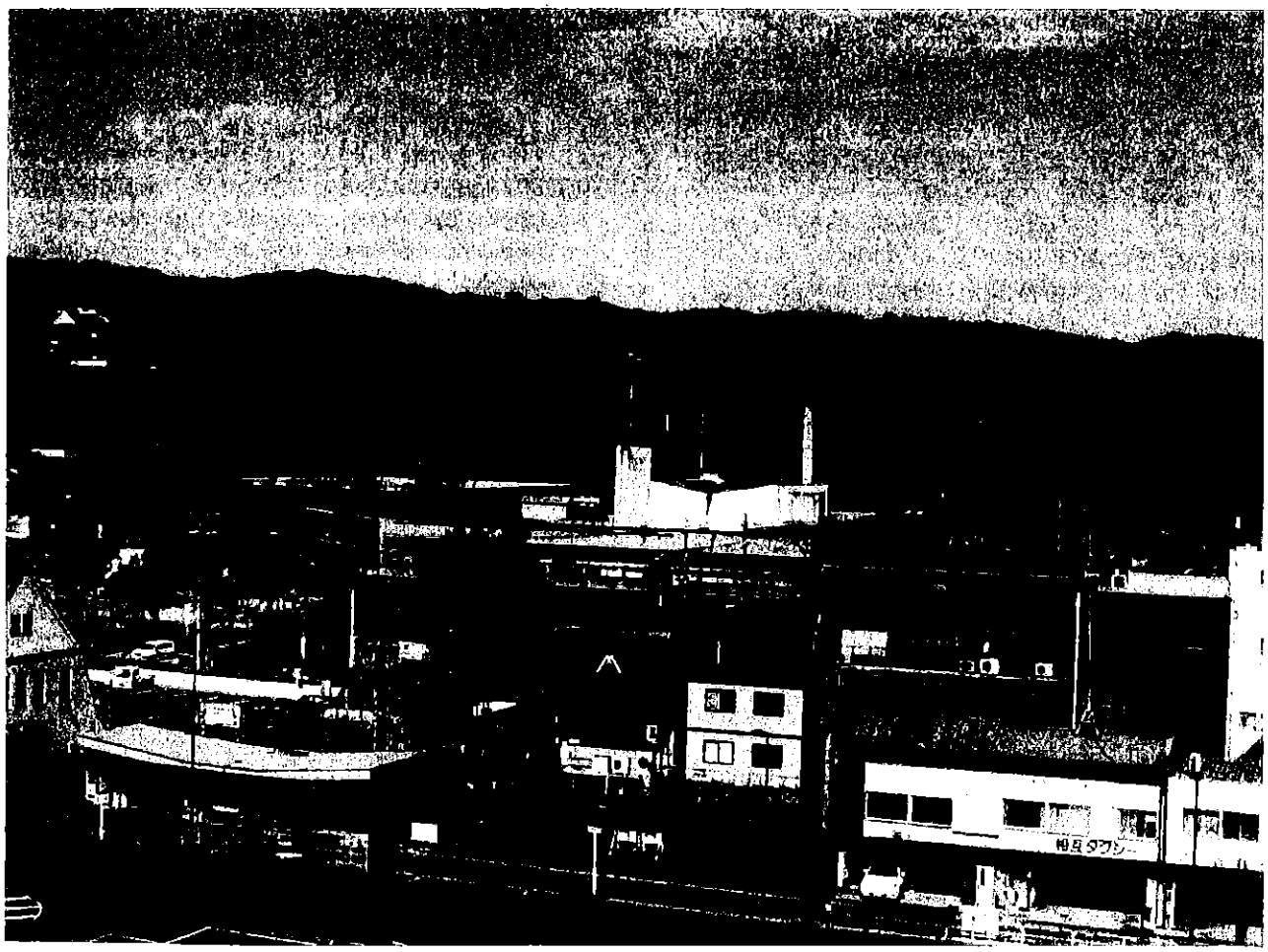

図 4　ハイトピア伊賀より旧伊賀市庁舎を望む

カメラを北西方向に向けて撮影。左上に伊賀文化産業城、左下に伊賀鉄道上野市駅、線路を挟んで中央に旧伊賀市庁舎が見える。旧伊賀市庁舎屋上の左手前にある細長い建屋にミュージックサイレンが格納されている。

[1] 上野市は現在の伊賀市の前身となった自治体の一つ。伊賀市を構成する際に中心になった自治体で、古来より伊賀上野とも呼び習わされてきた。
[2] 無記名「ミュージックサイレン設置のお願い」『上野市広報』昭和33年2月10日、三重県上野市役所市長公室秘書課、1958年、p.2。
[3] 無記名「音楽サイレン登場」『読売新聞』1950年9月11日、読売新聞社、1950年、p.3。
[4] 酢山義則「音楽サイレン　楽器の町になりひゞく」『読売新聞』昭和25年1月13日、読売新聞社、1953年、p.5.。
[5] 現在のヤマハ株式会社。
[6] 藤牧敏「音楽サイレンと短歌」『日楽社報』昭和26年11月1日、第41号、日本楽器製造株式会社、1951年、p.6。
[7] 無記名「ミュージックサイレン　3月末には完成」『三重実業新聞』昭和34年1月18日、三重実業新聞社、1959年、p.2。
[8] 同書。
[9] 無記名「近代都市象徴としてのビル　産業会館落成式　田中知事を始め来賓700余名　祝辞の数々が礼賛」『三重実業新聞』昭和33年7月7日、三重実業新聞社、1958年、p.2。
[10] 無記名「産業会館屋上にミュジックサイレン　市から10万円」『三重合同新聞』昭和34年1月20日、三重実業新聞社、1959年、unpaged。
[11] 同書。
[12] 無記名「ミュージックサイレン　3曲の美しい音色」『三重実業新聞』昭和34年2月7日、三重実業新聞社、1959年、p.2。
[13] [東仁己編]『伊賀の民謡』上野青年会議所社会開発委員会編、上野青年会議所、1978年参照。
[14] 無記名「美しい音を響かせて　上野市に音楽サイレン」『伊勢新聞』昭和34年3月27日、伊勢新聞社、p.4
[15] 無記名「美しい音を響かせて　上野市に音楽サイレン」『伊勢新聞』昭和34年3月27日、伊勢新聞社、p.4
[16] 無記名「音楽入りのサイレン」『産業経済新聞　三重版』昭和34年3月27日、産業経済新聞社、p.12。
[17] 無記名「ミュージックサイレンアンケートの回答」『三重実業新聞』昭和34年6月7日三重実業新聞社、1959年、p.2。
[18] 同書。
[19] 同書。
[20] 無記名「騒音取締り　市民から議会へ要望」『三重実業新聞』昭和34年7月7日、三重実業新聞社、p.1。
[21] 無記名「“ミュージックサイレン”しばらく休みます」『上野市広報』441号、三重県上野市役所市長公室秘書課、1982年、p.6。
[22] 無記名「ネコのあくび」『伊賀新聞』1982年2月14日、unpaged。
[23] 無記名「原爆投下日には黙とうを　サイレンを鳴らします」『上野市広報』451号、三重県上野市役所市長公室秘書課、1982年、p.4。
[24] 無記名「『防災の日』に訓練実施　午前9時にサイレンを鳴らします」『上野市広報』453号、三重県上野市役所市長公室秘書課、1982年、p.3。
[25] 無記名「上野の音楽時計　復活　日に4度なじみの曲を流す」『毎日新聞　三重』1982年12月29日、毎日新聞社、p.13.
[26] 同書。
[27] 無記名「元旦から復活　上野のミュージックサイレン」『サンケイ新聞』1982年12月26日、産経新聞社、1982年、p.13。
[28] 無記名「上野市のミュージックサイレン　元旦から復活へ」『伊勢新聞』昭和57年12月26日、伊勢新聞社、p.2。
[29] 無記名「ミュージックサイレン設置のお願い」『上野市広報』昭和33年2月10日、三重県上野市役所市長公室秘書課、p.2。
[30] 無記名「ネコのあくび」『伊賀新聞』1982年2月14日、伊賀新聞社、unpaged。
[31] 無記名「上野市のミュージックサイレン　元旦から復活へ」『伊勢新聞』昭和57年12月26日、伊勢新聞社、1982年、p.2。
[32] 無記名「上野市のミュージックサイレン　元旦から復活へ」『伊勢新聞』昭和57年12月26日、伊勢新聞社、p.2。
[33] 無記名「ミュージックサイレン新年から復活」『広報うえの』461号、三重県上野市役所市長公室秘書課、1982年、p.4。
[34] 無記名「元旦から復活　上野のミュージックサイレン」『サンケイ新聞』1982年12月26日、産経新聞社、1982年、p.13。
[35] 無記名「上野市のミュージックサイレン　元日から1年ぶりに復活　工費700万円　音が小さく工費のわりにはちょっとお粗末？」『伊賀新聞』昭和58年1月1日、伊賀新聞社、unpaged。
[36] 無記名「上野市のミュージックサイレン　元旦から復活へ」『伊勢新聞』昭和57年12月26日、伊勢新聞社、p.2。
[37] 無記名「上野の音楽時計　復活　日に4度なじみの曲を流す」『毎日新聞　三重』1982年12月29日、毎日新聞社、p.13。
[38] 無記名「上野市のミュージックサイレン　元日から1年ぶりに復活　工費700万円　音が小さく工費のわりにはちょっとお粗末？」『伊賀新聞』昭和58年1月1日、伊賀新聞社、unpaged。
[39] 無記名「年の始めの…」元日の朝流します　上野市教委」『朝日新聞』三重版1982年12月28日、朝日新聞社、p.13。
[40] 『伊賀タウン情報ユー』や《七つの子》の吹鳴、地域の人々の受け止めに関しては、https://blog.goo.ne.jp/seib_2005/e/1127d2c63192b3d5dfa3b4b531ee8e4d を参考にした。なお、歌曲《芭蕉》も紹介されている。
[41] 詳細は案内パンフレットによる。なお、応募は408人、応募総数1289点であった。
[42] 無記名「時報と音楽サイレン　いつから？　1959年に設置　防災無線も利用」『伊賀タウン情報ユー』2011年12月24日、570号、ユー、2011年、p.26。
[43] 岡本栄「市長の伊賀じまん　時を告げるミュージックサイレン」『広報いが市』平成26年6月1日号、伊賀市、p.24。
[44] 同書。

※先行する仕事に次のようなものがある。
有川正俊、瀬戸勝之「<戦後71年目の経済秘史>　(下)時告げる名曲サイレン」『東京新聞』2016年8月14日、中日新聞東京本社、p.2.
ミュージックサイレンの現状に関しては、次の文献もあわせて参照されたい。
兼古勝史「ミュージックサイレン　平和の時代を告げた時報」『B-maga』2018年10月号、サテマガ・ビー・アイ、2018年、p.51.